◆書評◆

謝花直美著

『戦後沖縄と復興の「異音」
米軍占領下 復興を求めた人々の生存と希望』

（有志舎　2021年　ISBN 978-4-908672-49-1　2600円＋税）

金　美恵
（東京大学　大学院総合文化研究科）

普天間基地の辺野古への移設問題で大きく揺れていた沖縄で、基地労働者だというある女性の話を聞く機会があった。女性は、過去に「戦車のキャタピラに張り付いた人肉をはがす作業」をした経験を打ち明け、米軍基地は撤去されなくてはならないという思いと、自身が生活のために基地労働者として働くことの矛盾で心が引き裂かれると、その苦しい胸の内を明かした。女性の苦悩に、米軍占領下で沖縄に基地が建設されて以来今日まで続く矛盾の集約と、沖縄戦後史の凝縮された生きざまの一断面を見る思いがした。本書『戦後沖縄と復興の「異音」―米軍占領下　復興を求めた人々の生存と希望』はそのときの鮮明な記憶を想起させた。それは、本書に描かれる、占領の暴力と政治に規定される生を生き抜く複数の主体のなかに彼女の苦悩が重なって見えたからかもしれない。

本書は、米軍占領下において、人々が生存のために作り出す生活圏の歴史形成過程を掘り起こし、被占領者の視点と生活の場から発せられるつぶやきのような「異音」を聴き取り、経済的数値には表れることのない、占領に規定され疎外された人々の生存を描く。

本書の重要な視点は、戦争中の「避難」や「疎開」、海外からの「引揚げ」とは異なる、沖縄島内における収容地区からの「帰還」をめぐる移動と労働、そしてそれらを規定する占領の政治について詳らかにしたことといえよう。本書は戦後、人々の「移動がまつろう『生活圏』」（13頁）を「歴史記述の係留点となる場所」（12頁）、すなわち、「移動と再移動の途上で形成された『生活圏』」（61頁）として捉え、軍労働を伴う移動と労働の変化における主体の変容を浮かび上がらせていく。

本書は、多くの紙幅を割いて、米軍による占領直後の時期に軍用地として奪われた土地の戦前の町界線や郡界線が、軍用

DOI：10.24567/0002000559

地としての領域ごとに再編成される様子を、集落ごとの単位でつぶさに考察する。それは、那覇を中心に、金武湾の消失、みなと村の合併、港を接収され軍港となった垣花、那覇市に合併された真和志村といった土地の変容についての考察である。とくに第四章で、帰還を地域の「復興」として捉え再建に向けて「生活圏」を形成しようとした真和志村（134 頁）について、那覇市の歴史に埋没した真和志村の歴史、合併後の那覇市の歴史に回収された真和志村の実情をこれまで知られていなかった資料を用いて明らかにした。これまで見えてこなかった真和志村の人々の農地の再生、社会の再建（復興）、自治にかけた望みが、米軍による居住地政策の都合に沿って踏みにじられていく様子を紐解く。どのように土地が奪われていくのか、そしてそれがどのように移動と生存を規定するのかという問題意識から「労働と移動と地域形成がどう互いに影響したのかという全体像」（133 頁）の叙述を試みる。そしてその複雑な境界の変動と夥しい境界再編のために集落に帰還するという「正常な回帰」（60 頁）が果たされない人々が生まれたことを浮き彫りにし、生活圏にいながら発生する「離散」や「故郷喪失」の複雑な実態をつきつける。沖縄において、土地と結びついた生活の基盤、共同性から切り離される「離散」や「故郷喪失」の問題が、「国境」や「県境」の境界線ではなく、「基地の拡張」という境界線によって強いられた生活圏を通して深く認識させられる。

本書は、また、軍労働を伴う移動と労働の変化における主体の変容について考察するなかで、移動から取り残される人々について指摘する。米軍の食料配給の政策変更に伴い収容地区で窮乏化する人々の就労問題と移動先が喫緊の課題となっていたことを背景に、多くの人々が生存のために軍労働に就くことになる。しかし軍労働と人々を結びつける過程や契機がそれぞれに異なることが指し示される。例えば、元の集落に帰還できないため、収容地区から金武湾へ、金武湾から那覇軍港へと移動と再移動を繰り返しながら軍労働で生活を支えていく垣花の人々に対して、帰還が許された真和志村では、帰還しても農業で地域の再建ができない人々を軍作業に誘導する（140 頁）というようにである。なかでも注目されるのは、米軍がコントロールする移動の条件となる「就労」の基準が労働特性と関わっており、この特性によって移動から置き去りになる人々が現れるという点だ。例えば第二章、第三章にかけて主人公として描かれる那覇市垣花の仲仕たちについてみれば、仲仕はもともとの生業が港での荷役仕事だったため、軍港における軍労働の仕事を確保して移り住んでいくことができたが、一方、同じ那覇の出身であっても、仲仕のように軍労働に従事することができない人々は、就労によって形成さ

れる集団から置き去りにされてしまうことが指摘される。那覇の人々の多くが元々商人であり、農業や労務に適していないとされ就労できなかったり（74頁）、また仲仕のような力仕事は女性にはできないとして男世帯の家族が優先的に集められた（82頁）ため、女性の就労が困難だった、という様にである。ここで、女性たちが生存のかかった就労に伴う移動から取り残されるという事実が浮き彫りにされる。女性たちの場合、軍作業に従事する環境には、強姦といった性暴力の危険にさらされる問題がある一方、米軍に移動をコントロールされている状況の下では、生きていくための限られた労働からさえも排除される、という二重の意味で従属させられている。そのため女性たちは収入が得られない収容地区に取り残されるか、十分には得られない仕事でも自力で探すほかなく、女性たちの貧困問題はさらに深刻に、窮地に追い込まれていたことが示されるのである。このことは、軍事基地化という占領統治の構造的暴力の下で、占領と労働がどのように関係を結ぶのか、そしてそこにどのような支配と従属の秩序が形成されるのか、労働のジェンダー化の視点からも考えるべき問題があることが示唆されているように思われる。

本書第一章の「ミシンと復興」では、こういった窮乏化する女性たちの中でもとくに生活が困難であった「戦争未亡人」たちが「ミシン」に収入と自活を手に入れるための希望を託し、わずかな隙間をかき分けて生活空間と自律の領域を広げようとする姿が描かれている。同時にそこには「パンパン」となった「戦争未亡人」も描かれ、彼女たちの語りが紹介される。「姉さん達いいわね」と洋裁師への憧れを露わにしながらも「私達は汚いでしょ」と、「転落女性」と見られていた当時の社会のまなざしを問い返し両者が隔てられている現実を如実にする。しかし続けて語られたのは「私ミシンでも1台買って、この泥沼から逃れたい」というつぶやきだった（55頁）。著者はこの「祈りのようなつぶやき」（56頁）に彼女たちの切実なまでの「復興」への思いを聴き取る。

本書は、「復興から取り残された人々」の生存のための強いられた「選択」や現状を通じて、改めて米軍による沖縄の占領と統治とはどういったものであったのかを根底から問う。そして基地という占領時代の「遺制」が残されたまま、日本に施政権が返還された沖縄が抱える戦前から今日に至るまでの矛盾について再認識することを促す。50年という節目にぜひ読まれたい一冊である。